

風の又三郎

森岡 正作

元朝や

十二月八日茶碗に罅の奔りをり
冬の蜂ひねもす玻璃の日を舐めて
静電気奔る指先獵期来る
枯菊の枯るる途中を焚かれけり
掃き集められて姦し柿落葉
風花の付き来る郷の宅急便
渦巻ける枯葉に風の又三郎

元日は窓から射す陽光で目が覚めた。まず玄関へ出て拍手を打ち、それから門に出て真正面の富士に向かつて拍手を打つのが例年の慣である。寝坊せずに早く起きて二、三十分も歩けば湘南海岸の浜辺へ出て、初日の出と富士山を拝めるのであるが、まあ晴天の神々しい富士だけで十分であろう。登四郎先生に「元朝や声先んじて晴れをいふ」や「元旦の穏やかな日を誰も褒む」という御句がある。

元朝や元旦という言葉は俳句をやるようになってから知った。元日は晴れるに越したことはない。雪国に居た少年時代、雪の降り積もった朝は一番先に外へ出て、門までの真っ新な雪に足跡を付けるのが好きであった。ぴんと張りつめた空気、雪が付着して直径十センチぐらいのロープのような太さの電線、屋根の雪も木々の雪も何もかも新鮮であった。

そんな純真な感性を、私は何時失ってしまったのだろうか。